



# 未来へつながる同じ「命」

あけましておめでとうございます  
2012年 元旦

2011年厚生会写真公募展 佳作『未来へつながる同じ「命」』川端亨さん(弘道小) 撮影

# 教育ひょうご

発行所 神戸市中央区中山手通4丁目10-8  
兵庫県教職員組合  
発行人 山名 幸一  
編集人 泉 雄一郎  
電話 050(3538)2346  
1部7円 年定価280円  
(組合員の購読料は組合費の中に含む)

2012/1・1

No. 1804

2面

## 新年号



兵庫県教職員組合 執行委員長 山名幸一

2012年の年頭にあたり、兵庫県教職員組合を代表し、組合員・ご家族の皆様にごあいさつを申し上げます。

昨年は、3月11日に発生した東日本大震災からの復旧・復興にむけ、被災地支援ボランティア活動、災害救援カンパ活動、EARTH員、養護教諭・教諭の派遣など延べ100人以上のなかがまが被災地の支援にあたりました。

11月のひょうご教育フェスティバル(第61次県教研集会)は、淡路3支部の周到な準備と協働により、子ども・保護者、地域住民の参画と協働による、地域に開かれた教育研究会となりました。2日間の延べ参加人数4,800人の内、子ども・保護者、地域からの参加者は900人のほり、教職員以外からのリポート数は17本あり、引き続き「開かれた教研」となりました。この成果を日教組第61次教育研究全国集会で発信するとともに、分科会での交流・討議をもとに

## 教育と福祉を中心とした 民主的な社会の実現をめざし、力強く歩もう！ 兵教組の統一と団結を強固に！

善、高校生に対する給付型奨学金事業の創設などをめ、総額5兆7千億円を越える予算を要望しています。今後は、この概算要求を政府予算案として確定させ、国会での標準定数法の改正にむけ、全国のなかまとともにとりくみましょう。

兵庫県では、「第2次行革プラン」が年次進行ですすめられています。昨年の対県確定闘争では、当初県教委は、県の財政状況の厳しさのみを強調し、県独自カットの継続や現給保障の廃止、勤務実績の勤勉手当への反映の拡大などを示唆してきました。

しかし、組合員一人ひとりの思いがこめられた賃金・労働条件に関する要求書を99.94%集約し、教育長に提出。粘り強い交渉と兵教組の団結の力を発揮し、重要課題において「独自カットの一部緩和・現給保障の維持」などの前進的

回答を引き出すことができました。今後も更なる改善をもとめていきます。

教職員の定年前退職者は増加傾向にあり、若年退職者も増えています。労働安全衛生法の改正、「教職員の勤務時間適正化対策プラン」、「学校業務改善普及推進事業」が分会で周知され、超過勤務時間の削減が

実感できるように、この問題を真剣に考え、ワーク・ライフ・バランス、健康管理体制の確立をはかり、生き生きと働くことのできる職場づくりにとりくまなければなりません。

昨年の第17回統一地方自治体選挙では、兵政連議員(ふじい訓博、掛水すみえ、さきもと祐治、岩下あきら、川上八郎、北野さと

子、おなか利治)7人が、皆様のご支援により厳しい選挙戦で勝利することができました。兵教組は、兵庫の教育をさらに前進・発展させていくためにも、県内各地でおこなわれる首長選挙、議会議員選挙では、推薦首長・推薦議員の拡大をはかる必要があります。とりわけ、9月に執行予定の三田市議会議員選挙では、兵政連議員「ひわた、充」さんの三選にむけ、法令を遵守しながらとりくみをすすみましょう。

## 「We are 99%」

日教組の旗の下に結集し、ともに頑張りましょう。



日本教職員組合 中央執行委員長 中村 譲

兵教組の皆さん、2012年、明けましておめでとうございます。日教組は今年も、あのアメリカ・ウォール街をデモ

行進した「We are 99%」の人たちの立場に立って、運動を展開していきます。富の偏在と公正なき分配が今日の世界を覆う諸悪の根源です。しかし、批判だけに留まってはなりません。「平和・人権・環境・共生」社会の実現に向け、創造的な改革提言を私たち自らが創り出し、社会に発信していくかなければなりません。東日本大震災から学んだ、「経済成長」と「人の幸福」は比例しないこと。「脱原発社会」の実現に向

け運動を強化すること。貴重なボランティア体験を教育の日常に生かすこと。労働基本権の回復と公務員制度改革、定年延長問題、年金・医療・子育て・福祉問題、沖縄をはじめとする基地問題、教科書問題、定数改善と労安体制の確立、「養成・採用・研修」の一体的改革を進化させること、学力問題、若年層雇用問題などのとりくみを通じて組織拡大を図っていきましょう。日教組の旗の下に結集し、ともに頑張りましょう。

## 阪神・淡路大震災17年 児童・生徒、教職員 追悼の夕べ



1月17日、17時30分からラッセホールで阪神・淡路大震災17年児童・生徒、教職員追悼の夕べが開催されます。阪神・淡路大震災の発生から、17年が過ぎようとしています。昨年は東日本大震災が起り、心を痛められた方も多いと思います。これは、大震災で犠牲となつた児童・生徒、教職員の方々のご冥福をお祈りするとともに、震災の教訓に学ぶ教育創造をめざす決意を新たにするため、10周年まで追悼式をおこなってきました。

追悼の歌では、東日本の被災地でも歌い継がれている「しあわせ運べるように」などが、神戸市立桂木小学校合唱団によって歌われます。メリアルコンサートでは、心休まる演奏や語り、独唱などが予定されています。また、1月21日には、阪神・淡路大震災と東日本大震災の教訓をつなぎ、震災の教訓に学ぶ教育と「防災文化」を創造する機会とするため、被災地域からパネリストを招いての震災シンポジウムが開催されます。私たちは1・17を共有しながら、この体験から得た成果と課題を集大成し、全国へ向けて発信するとともに、震災を乗り越える教育の創造的復興をめざして、引き続きとりくみをすすめていきましょう。



「てんりゅうといっしょ」 豊岡市五荘小学校四年 神谷 ひなた (こどもの詩と絵 第30集応募作品)

第61次兵庫県教育研究集会 記念講演

「大人が学ばなかった共生を」 子どもたちはどう学ぶのか

記念講演は「大人が学ばなかった共生を子どもたちはどう学ぶのか」と題し、講師に公益財団法人さわやか福祉財団理事長であり、さわやか福祉財団理事長であり、弁護士堀田力さんを招いて開催された。



さわやか福祉財団 堀田力さん

さわやか福祉財団は、「新しいふれあい社会の創造」という旗印のもとに、共生の道、ボランティアを広める活動を20年間展開するなかで、阪神・淡路大震災やこのたびの東日本大震災の復興支援活動にも携わっている。

「力になりたい」という本能がある。被災地支援活動のひとつで、北茨城の津波被害の方々を温泉に招待するバスツアーをおこなった。心身ともに疲れ果てた被災者の方々のストレスを少しでも解消できればという目的で企画するなか、立ち寄りた場所を尋ねたところ「私たちは福島原発事故で被災された方々の避難所を訪ねて励ましたい」という答えが返ってきた。

家を流され、人によって家族を流され、すべてを失ったどん底の中で「それでも自分たちには戻る場所がある」と、原発事故の影響でいまだ帰宅の目処が立たない福島県の被災者を少しでも励ましたいという申し出だった。

こんなエピソードもある。阪神・淡路大震災の際にも、ボランティアでたくさん集まった。参加した理由を尋ねると、

あるいは体験のない子どもにいくら説いてもわからないことだ。なぜならこれは、体験を通してしかわからないことだからだ。

そのときはまだボランティア活動の認知度が低かったこともあり、自分たちの行動がボランティアだと認識している人は少なかった。ただ、テレビに映る被災者の様子を見てたまらない気持ちになり、自然に足が向いたと言うのだ。

当時はまだボランティア活動の認知度が低かったこともあり、自分たちの行動がボランティアだと認識している人は少なかった。ただ、テレビに映る被災者の様子を見てたまらない気持ちになり、自然に足が向いたと言うのだ。

そのときに「人には人を助ける遺伝子がある」と感じたことを覚えている。これは一つの大きな本能であり、人間は大災害のような状況になれば自然と気持ちが動き、人の力になりたいと思うことを学んだ。

「共生」は体験から学べない

今回のテーマである「大人が学ばなかった共生を子どもたちはどう学ぶのか」だが、その答えは「体験」である。そういう状況になれば、何も学んでいなくても心が動き、助ける、共生する、という本能や衝動を人は誰でも持っている。これはいくら口で教えても、

が、この0歳児から3歳児、4歳児の人間力を伸ばす方法を親に教える機関がないことも、ひとつの課題である。

助け合い 成長する喜びを 子どもは知っている

人の役に立ちたいと思うようになる。これは本能だ。それが危ないからと止める親がいるが、これは教育ではない。助ける力、助けてうれいと思う「共助」の本能をそぎ落としていることになる。

さらに5歳、6歳になると「どうして？」と質問が増える。「何でおじさんは昼に出るの？」というように、極めて自然な質問が多くなる。これは自分で知識を身につけた「自助」の本能の表れだ。教育の一番基本となるこの本能を上手に伸ばし、もっと学びたいという意欲を引き出し、そこへ学びたいことを入れていくのが教育である。

「共助」というのは、自分で頑張る成果を生み出したことを覚えている。頑張ることはある意味ではつらいが、頑張った結果が出ることは快感である。そして「共助」によって感じられる温かいつながりの快感。基本的にはこの二つがあり、両方がそろって初めて人間力が成り立つ。

よって「自助」と「共助」のバランスがよい生き方のできる人に育てることが大切で、それが生きる力や人間力をつける教育なのだと思ふ。

例えば3歳くらいになると食器運びなどの手伝いをしたがる。自分でやりたい、



熱心に聴講する参加者のみなさん 淡路市立しづかホール

授業に入る前に児童にアンケートを取り、その中に「学校の授業や行事の中で何が自分の成長に一番役立ったと思うか」という問いを入れた。その結果36人クラスのうち20人近くが「縦割り」という行事を答えにした。

昔であれば家庭のきょうだい間で学び人間力をつけていたことだ。子どもたちはそれが自分の人格形成、自分の成長に一番役に立ったと答えている。縦割り活動の中で、子どもたちは共生の基本を体で感じているからこの答えが出たと考えられると、まさにこれが芽生えさせる体験なのだろう。

「体験活動が「やる気」を育てる」

何年も前になるが、NHKで放送されている「ようこそ先輩」という番組で出てくる「勉強しなさい」と一方向的に注いでいる、ますます勉強が嫌いになることには目に見える。

算数、国語などの知識教育は基本的に自助の力をつけることが目的だ。では、これをたくさんつけなければいのか。昨今、一部の自治体首長が教育方針として、グローバルに通用する能力を持った人間を育てることにかかっている。しかし、すべての子どもを国際的な能力を持った人間にする必要はあるのか。日本には、お百姓さんもおかし屋さんもおらず、みんなが英語で海外取引をする人間になることなどあり得ない。

日頃のご支援に感謝申し上げます。今後も仲間とともに懸命の努力を続けてまいります。変わらぬご厚情をお願いいたします。

あけましておめでとうございます。

- List of names and titles of members of the Military and Politics Connection (議員団) group, including 川上八郎, 岩下あきら, 川崎八郎, etc.

お正月ファミリーパズル まちがい探し! パズル制作: ひろみよこ

